ヴォルガの船曳歌

―中野京子氏にしたがってー

雪の降りしきる桜田門外で井伊直弼が殺されたのが 1860 年 3 月 24 日。そのころロシアではミーリイ・アレクセーイェヴィチ・バラーキレフがヴォルガ川沿岸地域を旅行し、「ヴォルガの船曳歌」を取材しました。

ロマノフ王朝はミハイル・ロマノフが 1613 年に即位してからニコライ二世の崩壊（1917 年）まで 300 年続きますが、「ヴォルガの船曳歌」はアレクサンドル二世（在位 1855～81）の時代、ロマノフ王朝崩壊のわずか 30 年ほど前のことです。アレクサンドル二世の親父ニコライ一世（1825～55）は「頭の先から爪先まで徹底した専制君主であり、恐怖による支配を目指し」ました。ニコライ一世が戴冠するとすぐデカブリストの乱が起きたくらいです。「バイカル湖のほとり」はこのときの歌で、こちらはレーピンの「ナロードニキの逮捕」や「思いがけない帰宅」を思い出します。

一方「ヴォルガの船曳歌」は、これまたイリヤ・レーピンによる『ヴォルガの舟曳き』が引き合いに出されます。製作年は 1873 年です。この絵について中野京子氏が「名画で読み解く　ロマノフ家１２の物語」の中で当時の状況を的確に書かれているので紹介します。

「ロシア屈指の画家レーピン描く最底辺の労働者たち。彼ら一人一人の人生と共に、地の底から響く呻きのごとき合唱『ヴォルガの船歌』までが、画面から漏れ聞こえてきそうだ」「現代のわれわれには、船曳という労働の実感が掴みにくい。船を港に導いている、あるいは浅瀬に乗り上げた船を移動させていると、勘違いする人もいるだろう。そうではないのだ。動力のなかった時代、河川での船の運航は、下流なら帆に風を受け、また無風でも流れに乗って進むことができたが、水に逆らって上流へのぼるには、馬や人間に曳かせるしかなかった。」「遠くに蒸気船が見え、すでに帆船の時代は終わっていることが示される。なのにロシアの船主にとっては、人を使うほうが安上がりだった。農奴もいれば、借金で出稼ぎにきた農夫、逃亡奴隷など、貧民がいくらでもいた。いくらででも労働力を買い叩き、使い捨てができた。当時の諺に曰く、『借金が払えなければヴォルガ川に行くはめになる』『馬には頸木、船曳には綱』『墓穴が掘られるまで綱を引け』

レーピン　「ヴォルガの船曳」　131.5×281.0

文責：B 朝倉